

河川敷ニセアカシア群落の拡大について

益田川と海をつなぐ自然環境保全活動組織

●概要

益田川河口域植生は、ヨシ (*Phragmites australis*) 群落優勢となっていた。この地区 (中学校区) は「吉田」と呼ばれ、その地名はヨシが一面に生息していたことに起因している。しかし近年、河口部河川敷においては、ヨシの生育面積が減少し、ススキや外来種のセイタカアワダチソウ、ニセアカシアの群落がその面積を拡大している。とりわけニセアカシアに関しては、急速に増殖しており、保全生態の観点から生物多様性の低下や在来種の圧迫、景観低下、また河川の安全管理の観点から、洪水時の流木化、不法投棄の温床などが懸念されている。

●モニタリングの目的と活動者

本活動組織では、日本海沿岸部のハマグリ生育環境が保たれるために、漁師やNPOが中心となって、益田川が持つ多面的機能の研究・調査をするともに、流域に住む市民への自然環境保全意識を促進することを目的として実施している。

●現状と課題

・益田川河口部河川敷におけるニセアカシアの分布について

本活動組織が平成 25 年度から、益田川河口部のヨシ帯のモニタリングを実施しているが、当初に比べてニセアカシアの分布拡大 (樹高 1m 程度) 目視できる状態となっている。(比較対象写真)

とりわけ、今市川水門から国道 9 号線までの区間は、住民の協力によって毎年 2 度のヨシ刈りを行っており、同時にニセアカシアの伐採を行っているが、翌年度萌芽が発生するだけでなく地下茎を通して生育面積が拡大している。特に冠水が少ないとみられる土手下部分においてはその群落の形成が顕著となっている。(写真)

・ニセアカシアの問題点

初期成長が早く、そのため侵略性が認められ、分布拡大によって従来の生態系を変化させる懸念を持っている。一般的に種子繁殖と栄養繁殖 (萌芽) の双方によって個体群を拡大していくことが知られている。駆除にあたっては以下のような課題がある。

- ・地下の根茎を効果的に除去する技術、地下部を死滅させる技術は確立されていない。
- ・伐採により増殖が誘発される。1 つの切り株から 10 本以上の萌芽が発生する。
- ・伐採時期を選ぶ必要がある。芽吹き前に伐採すると盛夏伐採した場合よりも旺盛に萌芽する。
- ・成長し木質化した後の「トゲ」は、大きく、固く、鋭く、けがの原因になる。
- ・実生や芽吹き直後は、幹もトゲもやわらかく、抜き取るまたは掘り取り、根も除去する。

引用文献：(黒河内寛之：千曲川河川敷におけるニセアカシア林の動態)

・参考：ニセアカシアについて

ニセアカシア（別名：ハリエンジュ、学名；*Robinia Pseudoacasia*）北米原産マメ科落葉高木。外来種

樹高は 20-25m になる。葉は、初夏、白色の総状花序で蝶形花を下垂する。奇数羽状複葉で小葉は薄く 5-9 対。基部に 1 対のトゲ（托葉に由来）がある。小葉は楕円形で 3-9 対。根粒菌による窒素固定を利用し、窒素養分が不足している土地でも定着できる。（Wikipedia より）

・参考：ヨシの機能

ヨシは、自然浄化作用を持ち、多くの生物のよりどころとなっているため、その価値が再評価されてきており、ヨシ原復元の事業が行われている地域もある。益田川においては、主として汽水域上部に広大な茂み（ヨシ原）を作り、河口部河川敷約 3ha に及ぶ。満潮時には水につかるが、水から出ることもあり、干潮時には干上がる。水流の少ないところに育ち、多数の茎が水中に並び立つことから、その根本には泥が溜まりやすい。このように多くの泥が集まり蓄積する区域は、その分解が多く行われる場所でもある。その茎は多くの動物のすみか、隠れ場としても利用される。泥の表面には巻き貝やカニなどが多数生息する。また鳥類との関わりもある。

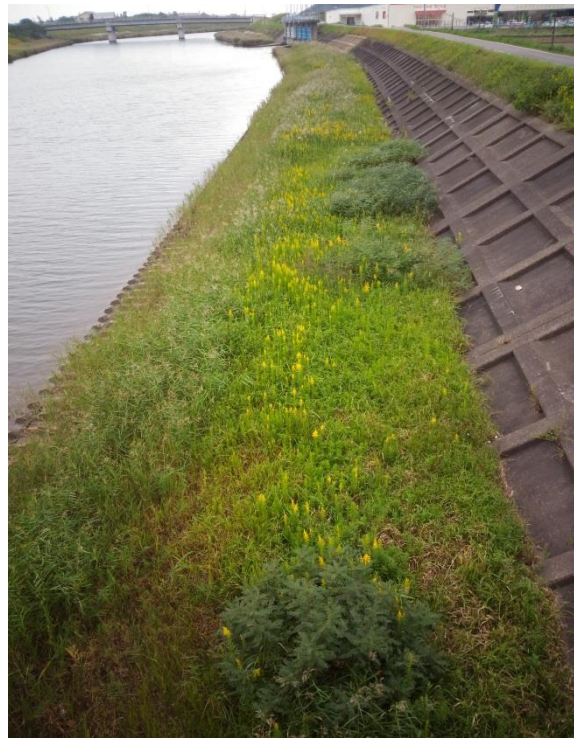
●提言：今後の対策について

- ① 調査・研究（益田川における分布拡大過程の解明）
 - ・ニセアカシアの分布状況・ニセアカシアの成長速度（樹木化）・周辺植物への影響・流域の乾燥化
- ② 駆除等にかかる方法検討
 - ・伐採による駆除方法の可能性・地下根茎の取り除き工法検討・その他の駆除方法
- ③ 河口部河川敷の総合的管理計画について
 - ・住民との協働による河川敷管理および利用の在り方検討

地図および写真撮影ポイント番号



写真 (2016年10月13日)





⑤

写真比較 2015年8月時点
ニセアカシア同群落



⑥



⑦



⑧



⑨